

## 研究論文

# ある校長経験者からみた斎藤喜博の校長像

## — その光と影

久保田 武

---

群馬県佐波郡島小学校校長在任中（1952～63）、他の追隨を許さない独創的な「学校づくり」を実践し、戦後日本の教育界に大きな足跡を残した斎藤喜博の新しい校長像を提示することが、この小論の主題である。なかでも従来ほとんど取り上げられなかった彼の影の部分に、彼同様校長経験者である著者の視点から批判と異論を加え、彼の新しい校長像の構築を試みた。反対に、すでに殆ど言い尽くされた感がある彼の光の部分については、今回はもっぱら先行研究の追認に留めることにした。また斎藤の校長像を多面的に考えるため、校長就任以前の彼の生き方と、島小以後赴任した境東小学校（1963～64）、境小学校（1964～69）時代の実践にも若干触れている。

**キーワード：** 斎藤喜博、校長像、学校経営、日教組

---

### 1. 初めに

斎藤喜博(1911～81) — 以下斎藤と呼ぶ — については、本人および本人以外によるおびただしい文献が存在する<sup>1)</sup>。その大部分は、彼の仕事を高く評価する内容で占められているが、斎藤の実践と理論に対して、もっぱら教育的見地から批判や疑問を呈するものも若干存在する<sup>2)</sup>。しかし校長経験者の視点から斎藤の校長像、学校経営手法を論じたものはきわめて少ない。あっても、それはもっぱら斎藤自身または直接彼の影響を受けた人々の指導により、彼の手法や考え方を学校経営に生かした事例であって、斎藤の実践に学ぶという姿勢で貫かれている<sup>3)</sup>。即ち斎藤の学校経営の「いいところ取り」であって、批判の言葉は筆者が知る限り見当たらない。これでは、見方によっては、斎藤を初代家元とする教育流派が存在し、この流派に属する同志や弟子たちの論作文が数多く、これに属していない教育者には、斎藤の遺産が伝わりにくい恨みがある。

校長として筆者の仕事は、彼が成し遂げた仕事の内容と影響力の大きさには到底及ばないと自覚している。しかし彼の実践を総合的には高く評価しつつも、問題点も取り込んだ校長像が後世に引き継がれてこそ、大多数の一般教師 — 特に若い教師 — から忘れられつつある彼の業績が、再び広く活かされる条件が整備されると考えている。というのも、斎藤の自著、「可能性に生きる」、「学校

づくりの記」、「島小物語」など彼の学校経営にかかわる一連の本を読む限り、斎藤の判断、打った手は常に正しく、反省の言葉がほとんど見当たらない。これではまさに教祖か家元の感がする。斎藤は、自分にとって都合の良いことだけを書いているのではないかという疑問も湧いてくる。事実、彼の本を何冊か輪読した筆者のゼミ院生も同様の感想を述べていた。さらに昭和16年発行「教室愛」の第1章「厳格教育」と第4章「火をつける」は、戦後再版された「教室愛」から彼自身の判断で削除されている。

そこで、この小論では、学校の校種・時代・地域<sup>4)</sup>は斎藤と異なるが、彼同様課題を抱えた学校のトップとして改革に取り組んだ筆者の視点から、疑問点、批判すべき点、そして二人の思想の違いに由来する異論などを網羅した斎藤の校長像を提示することにした。

## 注

- 1) 久保田武「斎藤喜博をめぐる文献リスト作成と主要文献解題」日本教育大学院大学紀要第1号2008を作ったがまだまだ不十分。来年にはよりよい増補改訂版を作成するつもりである。
- 2) 斎藤の実践と理論に対し、評価しつつも、例えば林竹二、鈴木道太、小川太郎、村田栄一、福井尚秀のように教育観、教授法、教授学、学校経営などの分野で、問題点、疑問、批判を述べる研究者もいる。しかしながら、校長経験者の目から見た斎藤の学校経営論、校長像は、あっても批判の言葉が見当たらない。地元の校長会、有力者、教育行政機関の関係者などの斎藤に対する中傷、攻撃は激しかったようであるが、筆者が知る限り文献として残されていない。
- 3) 例えば、単行本では、安里盛市「林竹二・斎藤喜博に学んで」一莖書房1992、根田幸悦「新米校長失敗物語—理想の教育を求めて」一莖書房1999、山内宣治「わたしの校長奮戦記—斎藤喜博に魅せられて」一莖書房2000、西江重勝「私の授業づくりの旅—斎藤喜博に学びながら」一莖書房2003、根田幸悦「斎藤喜博先生に導かれて」一莖書房2008、がいずれも校長経験者の著書であるが、学校経営手法の批判はない。「事実と創造」(一莖書房月刊誌)に掲載されている多数の同種の論文、例えば、前田秋信(長崎・森山東小他)、山口博人(広島・世羅中他)、福島敬三(北海道・松前台小)、伊勢隆(青森・戸山中)、翠誠治(岐阜・葛原小)、田中憲夫(宮城・石巻小)、菊池強(青森・七百中)などの学校づくりの記録でも同様の傾向がみられる。
- 4) 筆者：東京都立高校教頭(1984~87)、東京都立高校長(1987~92)、海外日本人高校副校長—校長代行(1992~96)、都内私立大学講師(1997~2001)、都内私立女子中学高校長(2001~05)、2006年から現職

## 2. 島小以前 — 斎藤校長を生み出した水源と源流

斎藤が島小校長就任後目覚ましい活躍をした下地は何だったのだろうか。これについては続いて紹介するように先行研究も数多くあり、この論文の本論ではないので、ここではその導入部として軽く触れることにする。

この時代の斎藤を知るための資料としてまずあげられるものは、「可能性に生きる」、「教室愛」、「教室記」、「続童子抄」など斎藤自身が書いた書物<sup>5)</sup>である。その他に筆者が今回参照した資料として、本人の最初の勤務校である玉村小学校時代に編集・執筆した校内研究誌「草原」全10号<sup>2)</sup>

横須賀薫と笠原肇の単行本<sup>3)</sup>、野瀬薫の論文一編<sup>4)</sup>、松平信久の論文一編<sup>5)</sup>、坂元秋子の論文二編<sup>6)</sup>、玉村小学校百八年史<sup>7)</sup>、塚本幸男の論文一編<sup>8)</sup>、群馬県教育史 別巻 人物編 1981 (群馬県教育センター) がある。なかでも坂元の論文は、玉村小、芝根小、玉村中時代に斎藤から教えられた生徒たちの回想と彼の著作をつき合わせ、当時の斎藤と生徒たちの関わりと彼の教育観の変化を論じたもので、方法論としていくつかの問題点を含み、結果を丸のみするわけにはいかないが、今までほとんど触れられなかった斎藤の影をあぶり出し、突破口を開いた調査・研究として筆者は高く評価している。以上のような資料と先行研究で、この時代の斎藤をできるだけ簡潔にまとめると次のようになる。

まず 14 歳から 5 年間在学した全寮制の群馬師範時代に、幅広い知識と教養、そして読書の習慣をしっかりと身につけたことは、その後の彼にとって大きな武器となった。「広い図書室はいつも私一人だったが、私は図書館の本を全部読もうと計画をたてた。そして図書戸棚の右の上から、どんな本でもつぎつぎと読んでいった。」<sup>9)</sup>という斎藤の回想は、その裏付けになる。

また仲間と群れず、正義感と反骨心を持ち合わせ、真面目で読書好き、そして独創的な人物像が、この時期すでに芽生えていたことが推測される。このような性格は、その後斎藤が島小で他の追随を許さない実践をするにあたって大きな原動力になったし、多数の支持者、追随者、さらには心酔者に囲まれることにつながった。その反面、自己主張が強く、安易な妥協を許さない頑固な性格(言うならば芸術家的性格)は、しばしば誤解を招き、反感を買って多くの敵を作り、後に繰り返される追い出し運動の原因になった。

さて 19 歳で教員になった斎藤は、玉村小 (1930~43)、芝根小 (1943~47)、玉村中 (1947~49) の三校で働いた後、群馬県教組常任執行委員文化部長 (1949~52) に選出された。島小校長就任 2 年 4 か月前のことである。筆者はこの期間を五期に分けて要約する。

第一期は、玉村小最初の 3 年間 (1930~33)、木下竹次の合科学習実践とその包容力で令名とみに高かった宮川静一郎校長を慕って同校に就職し、新米教師としてスタートを切った時代。当時病弱だった斎藤は、宮川校長に温かく見守られながら、大正自由教育の影響を受け、一生懸命学級経営と教科指導に打ち込んだ。後に島小校長となった斎藤がとった方策に、駆け出し時代に心酔した宮川校長の影響がみられる。ただし、二人の学校経営には大きな違いがあるように思われる。それは宮川がゆったりとした人柄で全体を包み込みながら、人望を背景に伸び伸びと教員を活動させたのに対し、斎藤は授業や行事で妥協を許さない、独創的で厳しい指導で教員集団の力量を高めた点である。

第二期は、1933 年から 43 年まで。宮川校長が郷里の富岡小学校長兼高等家政女学校長に転出した後の玉村小学校時代。斎藤が一人前の教師に成長、次いで実践のリーダーになった時期である。またこのころ一生の仕事となる著述と短歌活動を始めている。

この時期の 1 年前、1932 年 4 学年から担任した 76 人の女子クラスを高等科 2 年まで持ち上がり卒業させた。この間学力向上の工夫に心血を注ぎ、後に島小の教師に広めた教授法を編み出した<sup>10)</sup>。

同時に達成した学級経営と学力向上の見事な成果により、斎藤の実践は次第に校内外に知られるところとなり、外部の見学者も訪れるようになった。彼の著書にこの間の事情は詳しいが<sup>11)</sup>、反面、担任した一部の生徒から依怙臆負があったと回想されている。また体罰を含む厳しい指導のため生徒から怖い先生と思われたようでもある。授業中でも生徒に肩をもませたり、チョークを生徒に投げつけることもあった<sup>12)</sup>。しかしながら、このような一連の芳しくない側面は、斎藤の著書には現れない。その一方で、宮川校長後の校長たちにあきたらず、校内で勉強会を組織し、研究誌「草原」の発刊を始めている。それは彼が玉村小を追い出されるまで続けられた。

ところが玉村小の後期に男女組を担当してから、著述活動は盛んになるが、生徒の学習指導に以前のような全力投球は見られなくなった。自習時間が多くなり、生徒の見ているところで裸になって日光浴をしたり、自習時間中に原稿書きまでしたという当時の生徒の回想がある。相変わらず体罰も加えたようで、卒業式後彼を殴る計画までであった<sup>13)</sup>。しかしこの間の斎藤にとって好ましくない一連の情報も、彼の書物に見当たらない。

ただこの時期の斎藤の変身について、筆者はある程度理解できる。5年にわたって（最初の担任からは7年間）精魂を傾けた実践が一段落した後に訪れる達成感と成長した生徒との別れの寂しさ、そしてこみ上げてくる疲労感、その間の努力が大きければ大きいほど心身にこたえるもの。しかも次に待っている仕事は、斎藤のように常に新しい目標に挑戦を目指す人間に不向きな同じ仕事の繰り返し。斎藤も人の子だと実感したしだいである。

第三期は、芝根小時代（1943~47）の前期、すなわち敗戦—1945.8.15.—までの時期である。かつての同僚に裏切られ、個人主義者、自由主義者、国賊、反抗者とレッテルを張られ、惨めな気持ちで母校に戻ってきた斎藤であるが、敗戦に近いこの時期に、談話会や万葉集の輪読会を始めているのはさすが斎藤と思わせる。なお体罰は敗戦の頃まで続いていたが、戦後はしなくなったという元生徒の回想がある<sup>14)</sup>。斎藤は時代の変化に敏感だったようである。ともかくこの時期、校長や同僚から攻撃されながら、時流に迎合しなかった斎藤はまことに立派であった。

第四期は戦後の芝根小時代（1945.8.~47.3）と玉村中時代（1947.4~49.12）。斎藤は、新しく誕生した教員組合の幹部に選ばれるとともに、教員の研究会でも地域のリーダーになった。これまでの努力と蓄積が活かされる時が来たのである。

しかし敗戦後、校長を筆頭に教師たちの反省と謝罪はいまのまま、傷口の舐め合い、お互いのかばい合いが横行した。軍国主義に迎合した教師たちが、一夜にして民主主義礼賛者に180度変身したのである。もっともこのような転進は、程度の差こそあれ日本全国で同時進行したことであって、その頂点には戦争中日本を指導した人々の身の処し方があった。連合国から戦犯に指名されるまで責任を取らなかった元首相、閣僚、将軍たちは言うに及ばず、辞世の句を懐に帝国議会で反軍演説を行った尾崎行雄代議士が、敗戦後提唱した議員総辞職<sup>15)</sup>に賛成し自ら議員を辞めた者は一人もいなかったという<sup>15)</sup>。

ともあれこのような居直りに憤慨した斎藤は、いろいろな場面で特に校長の責任を追及してい

る<sup>16)</sup>。これが大方の校長とそれに連なる教員、地方ボスから反感を買い、「アカ」あるいは共産党と噂を流されることになった。一方教員組合運動では、ストやデモに訴える戦術や政治闘争至上主義に反対し、学校での実践重視を主張したので、組合の急進派からは保守反動と呼ばれた。当時斎藤はその怒りの捌け口を短歌に求めていたようである<sup>17)</sup>。

第五期は、群馬県教組文化部長時代（1949.12~52.3）。労働貴族ぶる県教組幹部に対しても批判的であった斎藤にとって、この時期は県教委幹部や日教組本部委員に直接知られる契機になっただけでなく、日教組の直接または間接の知的支援者であった左寄りの（通称進歩的）文化人、大学人、芸術家、出版人などのパイプが強化された時期であり、結果として島小での活躍につながった。なおこの時期にまとめた文化部活動の目標と方策の中で全村全町教育<sup>18)</sup>の必要性をあげ、後に島小で実現した。

## 注

- 1) 斎藤喜博全集の特に第1巻、第2巻、第11巻、第12巻、第15巻—2 国土社 1969~71
- 2) 「草原」全10号 玉村尋常高等小学校研究誌 1935~1943 宮城教育大学教育臨床総合研究センター復刻 2004~06
- 3) 笠原肇「評伝 斎藤喜博—生き方と仕事—」一荃書房 1991、横須賀薫「斎藤喜博 人と仕事」国土社 1997
- 4) 野瀬薫「戦前期における斎藤喜博の教育実践の研究と大正教育の影響」教育学研究 1995.12.
- 5) 松平信久「斎藤の教師としての成長の軌跡のあとづけ」事実と創造 150号 1993.11.
- 6) 坂元秋子「回想された斎藤喜博」都立大学心理教育学科卒業論文 2005、坂元秋子「島小における斎藤喜博像と教育観」首都大学人文科学研究科教育学専攻修士学位論文 2008
- 7) 玉村小学校創立百八年記念実行委員会編集 1982
- 8) 塚本幸男「島小・境小教育の源流」事実と創造 30号 1983.11.
- 9) 斎藤喜博全集 12巻「可能性に生きる」P98
- 10) 前掲4) 野瀬薫の論文では、玉村小時代の初期、斎藤は、岡田刀水士（市立高崎中央小学校）、中沢宗弥（群馬師範付属小・後に下川瀬小校長・市立高崎北小校長）他の先人の学習法を参考にして、彼独自の学習スタイルを構築していったようすが紹介されている。
- 11) 前掲1)「可能性に生きる」P118~124 P134~151
- 12) 前掲5) 坂元秋子の「回想された斎藤喜博」P10~14
- 13) 前掲5) 同上 P21~41
- 14) 前掲5) 同上 P42
- 15) 尾崎行雄「日本国民に告ぐ」P75 香柏書房 1947、他に「尾崎行雄全集版自伝」「尾崎行雄ものがたり」に掲載
- 16) 前掲1)「可能性に生きる」P220~222, P248~253 など
- 17) 例えば「斎藤喜博全集 15-2」p 93,104,105  
「狐面して又組合を抜けて行く戦争中全體主義の本を書きし輩が」  
「中傷策謀泣言投書虫けらの如きやつらが動くよ動くよ」  
「反共連盟などつくる農民がわれを憎む歌つくるもあわれ」
- 18) 前掲1) 同上 P287

### 3. 島小時代の斎藤喜博の校長像

#### (1) 斎藤校長の光の部分

大学人で斎藤の最も良き理解者と思われる横須賀薫は、その著書「斎藤喜博 人と仕事」の序文<sup>1)</sup>の中で、斎藤が持つ多くの顔と多様な仕事の側面を次のように整理し、箇条書きしている。

- (ア) 授業者としての斎藤喜博
- (イ) 授業技術の整理、解説者としての斎藤喜博
- (ウ) 教授学者としての斎藤喜博
- (エ) 学校の組織者としての斎藤喜博
- (オ) 教師の生き方を説いた斎藤喜博
- (カ) 歌人としての斎藤喜博

その上で斎藤の大きさ、仕事の量の膨大さ、質の多様さに思い至ると感想を述べ、これから斎藤の何を引き継ぐべきかと問いかけている。

私見では、斎藤が、「退職後も多くの教育者に感銘を与える情報発信と教育行脚を続け、死後も彼の志と手法を全国各地に広め続けている同志や弟子たちを惹きつけた影響力」も付け加えたいと思う。しかし、いずれにせよ横須賀は斎藤の仕事を的確に整理している。筆者も公立高校教員時代から、日本地理学会などを舞台に小中高大の教師たちと協力して、地理教育の改善のための研究発表、シンポジウムの企画と実施、国際地理学会議への参加、海外地理教育団体との相互交流などを手がけてきた。校長になってからも学校改革に取り組み一定の成果をあげることができた<sup>2)</sup>。

しかし名人の域に達していた斎藤の授業力・指導力（特に国語、芸術、体育）、実践に裏付けられた授業技術の整理と解説、教授学者として大学人と対等以上に渡り合った実績と力量、自らの厳しい実践に裏付けられた教師論、筆者が全く門外漢の歌人としての活動、そして学校の組織者（校長）として彼が達成した仕事と影響力など……、筆者はどの部門でも到底及ばないと自覚している。なかでも教師への指導を他の教師同席の場で行う発想は全く浮かばなかった。これにより教師間の切磋琢磨が促進され、授業力がある教師が次々に巣立ったと考える。

しかし、最初に言及したように、校長として彼が取った手法、考え方に対しては、筆者が賛成できない点がいくつかある。そこで（2）以下で筆者なりに、校長としての斎藤に対する批判と異論を展開することにする。

#### (2) 斎藤校長への批判1—地域社会との接し方

斎藤は、校長着任早々村の内外で「島村は文化村ではない」とずけずけ言ったと書いている<sup>3)</sup>。村の古老の話では、その結果たちどころに斎藤に違和感を持つ人々（特に村の指導層の間に）を作り出したそうである。これに対する斎藤の言い分を彼の著書から引用すると、「村全体の人が、明治文化への回想を断ち切り、今の自分たちに必要な現実的な文化を自分たちの手で作り出し、学校教

育も、そういう仕事の中の一つとして考えていくようにしなければいけないのだと思った<sup>4)</sup>。」とある。斎藤らしい論旨明快な言い分であり、この方策を高く評価した教育学者<sup>5)</sup>もいたが、このような斎藤の発言は、新任校長として賢い手法であろうか。筆者だったら、仮に斎藤の言うように文化村でないと思っても公に言うつもりはない。

その理由は簡単、人の心は理屈より感情によって動かされるのが常だから。島村の人々が誇りにしてきた文化村という誇りを、着任早々のよそ者に真っ向から否認されたら、理屈ではわかったとしても愉快に感じる村民はそう多くはないだろう。斎藤は、村を支配してきた富農層を標的にした一種階級闘争もどきの仕掛けをしたようであるが、この発言は、急進的な思想の持ち主から認められても、その他の村民と斎藤の間に良い感情が生まれたとは思えない。言わずもがなの発言であった。この種の問題では、できるだけ全体の和を図りながら改革を進めるのが、村でたった一人の小学校校長として取るべき姿勢であり、彼のこのような手法が好ましいとは思えない。こうした振る舞いが、斎藤の周りに集まる人と敬遠する人を分け、在任中執拗に続く追い出し運動の一因になったように思う。

反対に、島村の旧家が過去に果たした大きな役割に対し、斎藤はもっと謙虚に考慮しながら事を運ぶべきであったと筆者は考える。明治時代を迎えたころ、島村の中心部は利根川の中州（前島）にあった（図 1 参照）。しかし毎年のように襲う洪水との闘い、結果として生じる流路の目まぐるしい変化に伴う川欠と寄洲<sup>6)</sup>の処理は困難を極めた。これらさまざまな災難・災害を、ある時は私財を処分し、またあるときは土地を持たない住民に土地を分かち与え、そして明治 43 年(1910 年)の大洪水後、政府と県の援助を得ながら中洲の住居・学校・役場を利根川の南北兩岸に移すという大事業を成し遂げたのが（図 2 参照）、明治 14 年(1881 年)から大正 6 年(1917 年)まで通算 30 年以上にわたって村長職（最初は戸長）を務めた田島弥四郎である（但し途中明治 25 年から 30 年までは田島善平と田島武平に代わっている）。その他にも、田島弥平、田島善平、田島武平、田島弥三郎、栗原甚太郎、田島霞山他多数の人材が村政、産業、文化面で活躍した。中でも田島善平は、群馬県議時代に副議長としてあの足尾銅山公害事件を処理、また公娼廃止に尽力している。また彼は島村のキリスト教会誘致実現に貢献<sup>7)</sup>、社会福祉事業にも数え切れないほど献金をしている。特筆すべきは学制発布後わずか 1 年後の明治 6 年（1873 年）に、村民篤志家の援助で島小学校が開校したことである。

私見では、このように島村文化を築いた人々の有形無形の遺産は、その時限りで断絶するものではない。池に投げこまれた石の波紋は、岸边に次々に寄せる。大雨のとき地中にしみ込んだ水は地下水となり、やがて湧泉となって地表を潤す。一度生まれた文化は、血統、祖先の生きざまからの学び、祖先が達成した仕事から受ける刺激と励まし、長年培われた人脈などに支えられ、簡単には消滅しないものである。事実、島村文化は大正、昭和に引き継がれ、島小学校で入学から卒業まで学んだ田島弥太郎博士と橋本春雄博士が、1954 年（昭和 29 年）5 月二人同時に日本学士院賞を受賞するという快挙を成し遂げている。斎藤が島小校長就任 3 年目のことである。村人こぞって誇り

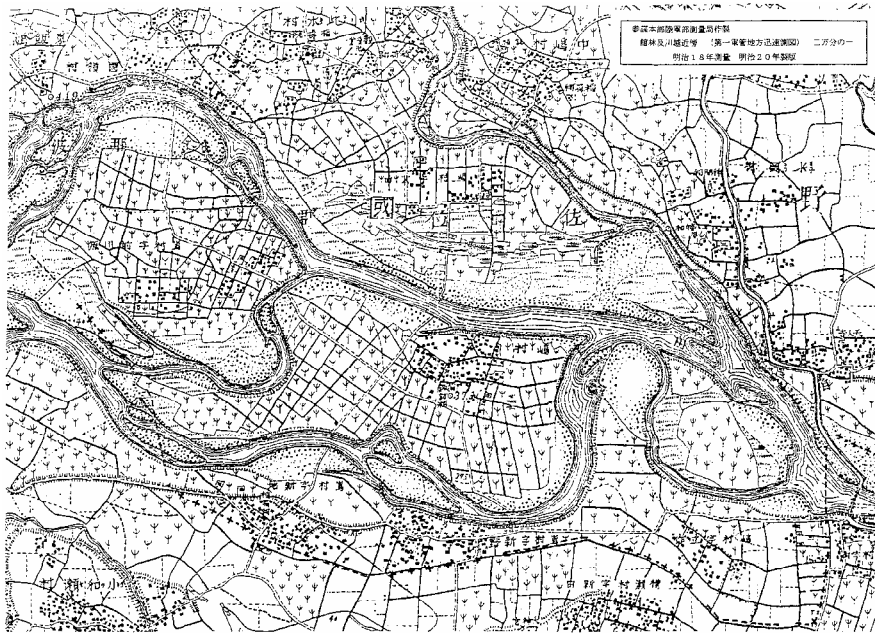


図1

この地図は、参謀本部陸軍部測量局が作成した「館林及川越近傍（第一軍管地方迅速測図）二万分之一 明治18年測量 明治20年製版図である（実物より縮小）。廃村になった前島と現在利根川の北岸に移転した西島と前河原が川中島（輪中）になっている。新田、新野の地名が両図に見られる。この後も洪水のたびに河道の変遷が続き、村人を苦しめた。桑畑が圧倒的に広い。



図2 島村とその周辺地図：5万分の1地形図高崎・深谷の合成図

昭和27(1952)年一斎藤喜博島小着任の年一応急修正図（実物より縮小） 利根川南岸の新地に島小（中学は同居）と村役場が隣接する。島小分校は、利根川北岸の西島、神社の東隣にあった。新地の本校とは渡し船で往来した。集落周辺一面に桑畑が広がっている。当時は高崎線の本庄駅から新地・新野を経て境町駅までバスの便があったが今は廃止された。太線が島村の境界線。その後境町に合併（1955）、現在は伊勢崎市(2008-)に含まれる。



に思い文化祭で祝った。子供たちにも定めし励みになったことだろう。斎藤自身、全村総合教育や学校づくりで、村内の高学歴層・知識層に助けられているふしがある（坂元秋子修士論文「島小における斎藤喜博像と教育観」P21~26 他参照）。また純農村でありながら、明治 20 年以来島村教会は、信者に支えられ、保育を始め今日までさまざまな文化的活動を続けている。

斎藤は富農支配から村民の解放を説いているが、島村では彼が着任する 6 年前（昭和 21 年—1946 年）から社会党系の田島嘉之がすでに二期目の村長を務めていた。田島村長は、戦後農地改革当時農民組合長としてその実施にかかわり、それをばねに村長に当選、1955 年（昭和 30 年）境町に合併になるまで村長であった。斎藤とも短歌を通じて旧知の仲であり、彼の学校経営を側面から助けた。島村は、群馬県の純農村としては社共両党の支持者が多かった。敗戦直後人口 3 千人余の島村で赤旗が百部近く配布されていたようだし<sup>9)</sup>、また 1953 年（昭和 28 年）の衆議院選挙では、社共両党の得票率が 36% に達している<sup>9)</sup>。このような傾向は、島村の教育水準の高さと関係がないとは言えない<sup>10)</sup>。即ち島村文化の影響が残っていると筆者は推量しているが独断であろうか。

ところで斎藤が、県教組文化部長時代に知り合った宮原誠一東大教授の教室と共同で、島村総合教育計画を 1953 年から 3 年計画で始めている。費用は村と東大が当時 13 万円ずつ折半した。その際東大から常駐員（公民館長に就任）として派遣された藤田秀雄は、最初の約半年、下駄ばき自転車といういでたちで農作業を手伝い、多数の農家に外泊し、村人の本音が聞けるほど親しくなるようひたすら努力した。ところがそのような藤田を見た斎藤は、「そんなことやってたって駄目だ。農民てのはね、馬鹿なんだから引っ張ってかないとだめだ。中に入って一緒になって考えていくなんて、そういうのじゃね駄目だよ」と助言したそうである<sup>11)</sup>。どうやら斎藤がいうところの民主主義に基づく社会教育は、一般村民の間からではなく、学歴があり意識が高い母親たちや青年層から村民教育を進める戦略だったようである。

またこの計画は、最も熱心に参加した青年層と一部婦人層に政治的波及効果を生んでいる。即ち、1959 年の地方選挙の時、旧島村から境町町会議員選挙に 3 名が立候補した。そのうちの 1 名は伝統的な部落推薦ではない社会党員である。しかしサークル活動に刺激された青年や婦人たちの応援を受け、部落推薦候補者に大差をつけて当選した。ここでも斎藤は村の反左翼グループから反感を持たれることになった。全村あげての総合教育計画が、村民を左傾させる結果になったからである。しかしこれは、斎藤校長・田島村長・東大宮原研究室のラインが中核となって実施した以上当然予想されたことではあった。村民の意識を分裂させたのか、それとも意識改革になったか、立場の違いで評価が分かれるところであるが、本来政治的には中立が望ましい村の小学校長の方向性が明らかになり、敵味方を一層はつきりさせる結果となった。このことは日教組の政治闘争主義を排する斎藤にとって皮肉な結果である。

筆者は、学校教育と住民の政治思想の違いが両者のトラブルの原因にならないよう努力するのが、校長の仕事の一つと考えているので、結果が予測できるこのような計画でなく、政治的な旗印が目立たないもの考えた方が良かったと思う。もちろん従来とかく行事消化中心の官製青年団・婦人

会活動が多かったなかで、斎藤が活発なサークル活動を育て、合唱などで明るい雰囲気を広げたことは良かったと思う。

### （3）斎藤校長への批判2－父母（特に母親）との関わり

斎藤の代表作「学校づくりの記」の中に「成長していく応援部隊」という章がある。彼の着任までは年1回の保護者会でも学級で3～4名しか出席者がなかったから無理だと断言する古手教員の主張にめげず、初年度7月から毎月始めた父母参観日の出席者を、暮れの農閑期には100%近くにした粘りとアイデアはさすがと感心させられる。このような劇的な成果は、その中身を教師側の一方通行ではなく、全体会、全学級の授業参観、授業への批判、合唱などを組み合わせ、特に母親にとって楽しく意味のある時間帯にした産物である。しかし残念ながら、この間斎藤には、校長として一部の母親に対し不適当な接し方があったようである。

当時のある母親の回想によれば、彼女と明け方まで話し合ったり、彼女を自転車の荷台に乗せて他の学校の参観に連れて行ったりしている<sup>12)</sup>。これでは誤解されても仕方がない。筆者は校長時代、PTA役員会の後などに誘われても、特定の母親と（父親とも）決して一緒に行動しなかった。近くの校長がある母親と夜の繁華街で時折見かけるといふ噂が流れてきたが、こうなるとは、PTAだけでなく学校全体の運営に支障をきたすことになりかねない。ついでながら、著者は父母からの季節の贈物が届いた場合、同等の品をお返しに送り、こういうことは二度としないで下さいという添え文をつけ、この種の虚礼を断ち切った。出入り業者、配下の教師の父母や教師自身からの贈り物に対しても同様の措置を取った<sup>13)</sup>。後にも出てくるが、斎藤は女性に対し脇が甘すぎた。そのため事実にとどまらず、増幅された噂まで駆け巡ることになったようだ。しかしその源を作ったのは、他ならぬ斎藤自身であり、校長としてきわめて不適切な振る舞いであった。

### （4）斎藤校長への批判3－教師への接し方

島小の教師の中で、斎藤の方針に賛同し、あるいは斎藤から資質を認められ、厳しく鍛えられて立派な教師に成長した人々の論文、手記、追悼文、回想などに目を通した限り、斎藤への正面切った異論や批判を筆者はまだ見ていない。斎藤自身が書いたものでも、若い時代を除くと強い自己批判の記述はないと言ってよい。確かに彼は稀に見る実績を残した。しかし彼に育てられた教師たちは、彼の光の部分だけを書いているように思える。しかし光があるところ影も必ず存在する。そして斎藤の場合もそうであった。

斎藤の指導について来ない、あるいはついていけない教師には、教職員以外の第三者にもわかるほど人前で辛く当たったり、企画会議などから外したりしたと、当時斎藤に頼りにされた古くから聞いている。「斎藤天皇」という綽名は、彼の代表作「学校づくりの記」から想像することは難しいが、このような事実を知るとなるほどと思う。もちろんだからこそ大きな仕事ができたとはいえる。また若い女教師たちには、当時の常識を超える親密な態度で接し、スキンシップを連発していたと

いう<sup>14)</sup>。これに似た話は、前掲、坂元秋子の論文にも、可愛がられた教師の一人が回想している<sup>15)</sup>。女教師に対するこのような親密な態度は、それを目撃した男性教師は勿論のこと、他の女教師の誤解や嫉妬心の温床になりうるし、斎藤へのあらぬ噂の震源になった。事実今でも境町・島村・玉村町の関係者で、私が接した範囲の人々から、斎藤が女好きであった、女性との噂が絶えない人だったという芳しくない噂を聞かされている。死後 27 年後も噂は続いているのである。島村教会の S 牧師も 8 年前の着任早々、斎藤のように女性と親しくなりすぎないようにと教区の村人からわざわざ忠告されたと、ご本人から聞かされた。

筆者は、このような情報を分析し、少なくとも斎藤の意に染まない教師と女教師の扱い方に校長として好ましくない点があったと判断している。「学校づくりの記」など一連の彼の著書、彼に可愛がられたり評価された教師の書いたものだけを情報源として、斎藤の校長像を組み立てる傾向が従来多かったようであるが、それは総合的な斎藤校長像ではない。偏光フィルターを通して見た断面像である。

校長時代、筆者は、能力や意欲に差があっても、人前で辛く当たることはしなかった。特に女教師と誤解による噂も立てられないよう細心の注意を払った。もちろん女子生徒を含めスキンシップなどしたことはない。私立女子中高校長時代には、着任早々校長室のドアに大きなガラス窓を作ってもらい、密室にならないようにしたものである。

### (5) 斎藤校長への異論<sup>16)</sup>—日教組・県教組親の違い

まず校長になってから定年退職するまで組合員に留まったことは、配下の教師たちから親近感を持たれ、親左翼的（通称進歩的）教育学者、知識人、出版界や言論界関係者からも一定の評価を得たであろうが、地元校長会、教育行政関係者、地域の政治家、反左翼系住民からは誤解と反感を持たれ、攻撃や中傷の原因になった。筆者だったらそこまで意地を張らないし、また日教組と左翼政党の路線に若い時から反対していたから、組合員校長になるわけがない。彼らが唱えた路線<sup>17)</sup>が、その後の日本の進路にとって如何に不適切であったか、歴史が証明している。その点で斎藤の世界観は、他の教員組合指導者・親左翼的学者・知識人・言論人などと同様、残念ながら視野が狭いものであった。

先に「2. 島小以前」の項目で触れたように、戦争中は皇国史観と軍国主義に迎合し、敗戦後は一転民主主義を礼賛して教員組合運動に参加、そして今度は集団で組合脱退という醜い進退を見せた校長と教員たちを、斎藤は痛烈に批判した。このような校長たちの無節操な進退が、斎藤を憤慨させ、意地になって組合員に固執したのかもしれない。

一方、発足当時から日教組、県教組の幹部は、もっぱら社会党と共産党支持者または党员で占められ、選挙で左翼政党を支援し、また多数の組合幹部が左翼政党から立候補、当選後政治の世界に転身した。当然組合費から献金も行われていた。さらに日教組は、左翼政党や左翼系学者・文化人と一緒になって、日本政府が取る政策をことごとく保守反動、軍国主義復活、戦争への道（通称逆

コース)として攻撃、その結果体制側と反体制側の間で、新立法公布と絶対反対闘争の応酬という悪循環を招き、教育改革が教育の問題として話し合われぬ不幸な時期が続いた<sup>18)</sup>。この渦中において齋藤は、1954年いわゆる教育二法審議の際、日教組側の参考人として反対の意見を陳述している。このような日教組に、校長になってからも齋藤が留まったことは、反左翼的地元民や地元校長会から不必要な誤解と反発を受け、執拗な排斥運動が繰り返される一因になった。

次にストライキに対する齋藤の考え方に異論を唱えたいと思う。次の文は齋藤の著書「学校づくりの記」前掲P107～108からの引用である。

「(昭和)27年12月8日は、県教組本部の指令で一斉早退する日であった。自分は分会の責任者でもあったので、議長になってみんなに討議してもらった。(中略)私は反対だった。私は『私も一斉早退はこわい。子どもにも迷惑をかけて気の毒だ。けれども、正式の手続きによって組織できめたのだから、自分たちできめたことである。きまったからには、へっぴりごしでも、弱くても、それを守ることが大切だ。自分たちできめたことを守るためにくいだけれどやる>それでよいのだと思う』といった。(中略)挙手で採決の結果全員が賛成し、3時間で授業を打ち切り、体調不良の2名を除いて支部大会に参加した」。民主的な職場運営だと感心する向きも多いかも知れない。しかし筆者は、このような齋藤の考え方に全く反対である。

そもそも公立学校教員は、議会民主制に基づく政府が発布した法律<sup>19)</sup>によって争議行為を禁止されている。にもかかわらず、日教組(したがって県教組も)は、多くの場合他の官公労と一緒にあってそれを無視し、ストライキを繰り返してきた(一斉年休闘争も含む)。齋藤校長も組合本部の指令のたびに、配下の教員のスト参加による授業放棄を認めてきた。肝心なことは、教師は任意参加の組合員である前に地方公務員であって、どちらの属性が優先されるべきであるかははっきりしている。学校が双頭の蛇になっては意思決定がままならず、板挟みになった校長の自殺まで起こっている。教員が自ら法を無視しながらどうして児童生徒に学校のルールを守れと言えようか。また戦術的にも愚策である。ストによって授業がなかった当座、喜ぶのは児童生徒であり、親の大半は授業が行われないことに反対する。大都市圏なら私学を喜ばせ自分の首を絞めるばかりである。同じ地方公務員でも、清掃局や公営交通のストと比べるとその効果に天地の差がある。筆者は平教員時代、スト指令のたびに、毎回うんざりしながらも組合指令に忠実な教員たちと議論し、妥協しつつも生徒を放棄しないようにしてきた。もっとも共産党が教師聖職論を打ち出してからは多少楽になったが。また校長になってからは、保安要員を残すから時限スト参加の報告をするなどという本部の指令に基づく組合の要求をこう言って断った<sup>20)</sup>。「ストをしながら、スト報告をするなど要求している事実を、皆さんは生徒や保護者に言えますか。あなた方は恥ずかしくありませんか？」返事はなかった。こうして筆者の学校のスト参加者は賃金カットされたが、これ以後ストも破廉恥な要求もなくなった。そして学校改革はスト騒ぎに関係なく進行したのである。

最後に勤評闘争に対する齋藤の考え方と行動について疑問を投げかけ、この項目を終わりとする。1958年(昭和33年)全国規模で勤評阻止闘争が行われた。しかし教師間に意欲、授業力、生活指

導力で差があることは誰も否定できない。悪平等組織は成果が上がらず、優秀な人材確保ができず、人材登用もままならない。その結果、仕事の成果より、教員同士の人間関係が優先される学校が輩出する。欠点はあるが勤務評定が必要なゆえんであり、大方の企業や官庁でも実施されている。日教組は、勤評の実施を阻止するのではなく、その欠点を最小限にするよう社共両党の支援を得て文部省と話し合う路線をとるべきであった。しかし現実には相変わらずマンネリ化したスローガンを前面に掲げた対決路線であり、左翼系学者・文化人による勤評反対声明（1958.5.10）のおまけまでついていた。

斎藤は、日教組本部の勤評闘争指令に従い、島小教師の一齐休暇闘争も是認している（斎藤喜博全集 11 島小物語 P503~517 に詳しい）。しかし筆者は、斎藤自身の勤評に対する考え方を教師にぶつけ、教師の視野を広げてもらいたかったと思う。公務員でありながら組合員でもある関係を明らかにして欲しかったと思う。

次の文は、日教組第 44 回中央委員会が「全国教育長会議への警告（1957.10.25.）」（前掲「戦後教育労働運動史」P180 労働教育センター）と題して発表したものである（抜粋）。

「(前略) 勤務評定にたいして、次の点を強く指摘し、反対の意思をくり返し明らかにしてきた。

すなわち、第一に、子どもの自主性と学力を伸ばす国民のための教育はできなくなる。

第二に、教育の特殊性から、科学的、客観的な評定を行うことは不可能である。

第三に、昇給昇格のストップや不当転退職に悪用されるおそれが多分にある。」

この文書を読んで、筆者は反対する論拠の次元の低さと視野の狭さに、同じ教員としてやりきれない思いがしたが、組合員でありながら組合一辺倒でなかった斎藤は、本音ではどう考えていたのだろうか。

## （6）島小公開研究会と訪問者激増の問題点

斎藤の在任中全国から約 1 万人の人が、島小を訪問している。また 1955 年（昭和 30 年）に始まった公開研究会は、1962 年（昭和 37 年）までに 8 回開かれ、教師、教育学者・研究者、学生、保護者、教育行政関係者、マスコミ・出版人、芸術家、知識人、政治家などなど実に多方面で活動している人々が多数集まった。そこで彼らが見聞した教師と子どもたちの実践は、多数の訪問者に驚きと感動を与え<sup>21)</sup>、斎藤と島小の名声は全国の教育界、特に小学校に広まった。演出家としての彼の才能が見事に開花した企画でもあった。

しかし斎藤と島小が有名になればなるほど、非難、中傷、嫉妬、あらさがしの類が、地元を中心に増えてきた。この背景は、(2) から (5) までの項目でもあげてきたが、まずは地元の校長 (OB を含む) をはじめとする教職員、教育行政関係者、地域社会の指導者の嫉妬と自己弁護がある。特に斎藤が彼らが逆立ちしても敵わない華麗な人脈をこれでもかと思いつけながら、全国から年々大勢の参観者を集め、斎藤と島小の教育が全国的に有名になっていくのが耐えられなかったのであろう。また売名行為が強すぎると感じた向きもあったであろう。斎藤もそのあたり周辺校に気配りし

たり彼らの実践も積極的に紹介したりすれば、いくら風圧は弱まったであろうが、もともと齋藤はそういう気配りをする性格ではない。このミニ版を、2003年から08年まで民間人校長として全国の注目を集めた東京都杉並区立和田中学藤原和博校長の実践で、私は親しく見聞している<sup>22)</sup>。藤原校長の手法が評判になったら、その手法のいいところ取りをし、自校で改良を加えて実践すれば、切磋琢磨を通じて教育効果が点から面に広がる。民間企業ならライバル企業の良い点を盗み取ることには懸命になる。しかしこの場合も区内の中学校は総じてそっぽを向き、反対に遠くの学校や教育委員会、文科省から学びに来る。このような学校関係者の心の狭さと嫉妬心の強さを改めることが教育界にとって急務であろう。改革への意欲がこのように鈍いのは、嫉妬心だけではなく、公立学校の学校評価制度がまだ十分機能せず、親方日の丸でも学校として存続でき、自分たちも地位や減俸の心配がないからでもある。ともあれ日本の学校社会は、他の職場と比べて横並びと年功序列意識が強い職場である。

## 注

- 1) 横須賀薫「齋藤喜博 人と仕事」P8 国土社 1997
- 2) 久保田武「校長がかわれば学校が変わる」夏目書房 1997
- 3) 齋藤喜博全集 11「学校づくりの記」P64 国土社 1970
- 4) 同上P64
- 5) 野村新「人間齋藤喜博」事実と創造 127号 1991.12. 但し研究者、学長として立派な仕事をされた方と考える。
- 6) 川欠は洪水などで土地が流失すること。寄洲は洪水などの際土砂が他所から運ばれて堆積され土地が増えること。この前後村史関連の記述は以下の資料による。金子緯一郎「利根川と蚕の村」上毛新聞社 1979, 島小学校百年史編集委員会編「島小学校百年史」(非売品) 1972、「群馬県人名大辞典」上毛新聞社 1982,「境町史」第1巻自然編 1991、第3巻歴史編上 1996、第4巻歴史編下 1997。
- 7) 1887(明治20年)田島善平寄付によるキリスト教講義所開設。1897(明治30年)栗原甚太郎が土地を献納し新会堂(現在位置)と牧師館完成。「島村教会百年史」日本基督教団島村教会 1987による。さらに2008年栗原甚太郎氏の御子息、栗原壽郎氏が新たに土地を寄贈された。
- 8) ~9) いずれも宮原誠一ほか4名「島村における青年・夫人の学習活動」P105 教育学研究 1959.12.
- 10) 当時島村の高校進学率約55%は、他の境町地区と比べて約20%高かった。資料は8)~9)に同じ。
- 11) 前掲 坂元秋子「島小における齋藤喜博像と教育観」P19 首都大学教育学研究科修士論文 2008.3.
- 12) 前掲 P25~26
- 13) 前掲 久保田武「校長がかわれば学校が変わる」P229~232 「保護者と校長」参照
- 14) 齋藤が校長赴任当時、村の青年団員として全村総合教育に参加して島小に出入りし、齋藤とも身近に接していたJ.K.氏から筆者が聞いた話。彼は反齋藤ではなく、後に部落推薦ないまま社会党から町議に立候補し当選した人物。その彼からみても齋藤の若い女教師に対する馴れ馴れしい態度は好ましくはなかった由。
- 15) 前掲 坂元秋子「島小における齋藤喜博像と教育観」P43~46 この中で回想者は、齋藤に様々な場面で特別扱いされたことを述べている。これは配下の教師を公平に扱う原則から大きく逸脱している。
- 16) ここでは批判より異論の方が適切と考えている。齋藤と筆者の間に思想、政治的立場の違いがあるから。
- 17) 講和条約後の日本社会党と総評の平和路線に強い影響を与えた左寄りの学者や知識人の集まりである平和問題懇話会が、1950年12月号の「世界」(岩波書店)に発表した報告書である。平和構想として、全面講和、再軍備反

対、軍事同盟と基地の提供反対、中立不可侵などがその基調であった（日高六郎「私の平和論」P105 岩波新書1995 による）。

この報告の影響もあってか、第11回日教組定期大会宣言（1954.6.3.）には、次のような文言がある（抜粋）。

「桑港両条約が国民の憤激と反対にも拘らず反動勢力の手によって締結されて以来、わが国は一路戦争と隷属への途をたどるに至った」（戦後教育労働運動史（1945~69））星野安三郎他2名編 労働教育センター 1979 による）

このような、戦後皇国史観をマルクス史観に乗り換えただけの単細胞的思考に筆者は呆れるばかりである。当時ソ連を盟主とする共産主義の拡大戦略に利用されていたのか、あるいはトップはその一翼を担っていたのかもしれない。

- 18) この点について、大田堯が、1984年発行の「国分一太郎文集第一巻 新しくすること 豊かにすること」の解説で書いている次の文は興味深い。「わたくしたちの国では、国益と結びついた教育が、ほとんど通念化して、近代化、国家主義化、そして軍事化、超国家主義化への手段として、国家権力が教育を支配しつづけてきた。これに対して、この体制を批判し、克服しようとする革新の政治力も、同じように教育をせっかちに利用しようとするところから、教育の本質はともかく政治主義の中におおわれて、ほんとうの姿を見失ってきた傾きがある。」国の記述内容がもっぱら戦前で、革新側の記述がもっぱら戦後の内容によって対比されている。したがってこの比較は手放しで当たっているとは言えないが、ともかく一方のオピニオンリーダーである大田堯が、革新側にも問題があったことを認めているのは、戦後40年という時間経過のなせるわざであろうか。
- 19) 地方公務員法第37条で争議行為等が禁止されている。さらに地方教育行政の組織および運営に関する法律 第47条で地方公務員法の争議禁止規定を公立学校教職員に適用できる旨規定されている。
- 20) 前掲「校長がかわれば学校が変わる」P65~68
- 21) 斎藤が文部大臣の視察を断り、代わりに招いた大江健三郎は、当時島小1年生の授業を見た印象を、「未来につながる教室—群馬県島小学校」『厳肅な綱渡り（下）』講談社文芸文庫の中で、「眼がキラキラしている。頬に集中力があふれている、というようなこともある。しかしもっと内的に、その農民ジュニアたちの顔は感動的なのだ。おそらくは、解放された顔、自分自身を解放してくれる場所と人を見つけている自分に信頼をもった顔とということができらう。」と書いている。また日高六郎は、「日高六郎教育論集」一ツ橋書房 1970 に収録された「斎藤喜博さんの仕事」の中で、「私が島小をおとれたのは、1962年の卒業式と、同じ年の12月の公開研究会であるが、それは、めったに経験することができない、芸術的ともいうほかがない感動を受けた日であったことを、正直に告白しておこう。」と書いている。
- 22) 筆者の大学の院生を2006年度3名、07年度5名、08年度1名を学校実習生、学ボラ、補助教員として派遣している。

#### 4. 境小時代の斎藤の校長像

##### （1）境東小の1年（1963~64）

紙面の関係と筆者の調査がまだきわめて不十分なため、今回は境東小校長および境小校長の部分は残念ながら簡略に記述することをお許しいただきたい。境東小校長の急死のため、斎藤は急遽同校校長を1年だけ勤め、続いて1964年から1969年まで境小学校長として定年まで働き退職した。境東小時代の最初は激務からの解放と疲労のため虚脱状態で過ごしたと書いている（「斎藤喜博全集 12 島小以後 P407」）。無理もないことだ。1年間、島小と同じことは繰り返さない決意で学校経営

に臨み、たった1年間であったが、教師、児童、父母それぞれに並みの校長以上の影響を与え、境小へ転勤した。彼の言葉を借りれば「たまたまの1年」だった。しかしその間、岡山、秋田、山梨、長崎、栃木、千葉、熊本、福岡、山口、静岡の各県で講演または座談会、東京で出版その他の打ち合わせに出かけている。いよいよ退職後の大きな仕事になった教育行脚のウォーミングアップが始まった感がする。

## (2) 境小の5年

境小学校は境町の中心校で、斎藤が着任時の生徒数は952名、普通学級23、特殊学級2、職員数30名の大規模校、児童はほとんど町の子供であった。斎藤はここでも小規模校の島小だからできたという中傷を跳ね返し、見事に学校改革を実現している。この間の成果の記録として、文末に私の手元にある資料をあげておいた<sup>1)</sup>。

島小に比べるとはるかに資料が少ないことには理由がある。それは斎藤が「島小のくりかえしはすまい。島小の到達した高さからこの実践をはじめよう」<sup>2)</sup>と決意したからである。彼は島小のように学校を公開しなかった。参観希望やマスコミ取材も断った。こうすることで、教師、児童、父母が落ち着き安心した。その一方で、彼が持つ指導技術を教師と児童にどしどし広げ、二部合唱すらできなかった児童が、高学年では男声五部合唱ができるようになった。得意の跳箱指導でも瞬く間に効果が現れた。プール指導をしなかったこの学校の水泳を、県下のトップ校に押し上げた。そして汚く騒がしかった学校の雰囲気が一変した。授業は始業時間通りに静かに始まり、1000人の集会も1学期のうちにマイクなしでできるようになった。斎藤は大規模校でも立派に校長ができることを証明したのである。また斎藤校長は教育力はあるが、設備を整える政治力に欠けるという風評も吹き飛ばした。大規模校では教員定数に余裕があるので、役所へ出かける時間的余裕を持てるようになったというのが斎藤の言い分である。

このような実績は、もっぱら彼の手記から引用したものであるが、彼の心に、自信と余裕が生まれていたことが、何よりの原動力であったように思う。一校目で大きな実績をあげれば、二校目以後校長の心にゆとりが出る。まして公開、参観を断ったのである。時間と心に余裕が生まれて当然であろう。配下の教師たちもまた校内活動に専念できた。ただそれだけに、境小での斎藤の実践の資料がまだ非常に少なく、未知の部分が多い。今後の新しい調査・研究に期待したいし、筆者としても気になる情報があるので、さらに調べ、島小のように「いいとこ取り」にならないようにしたい。というわけで、まだ境小での斎藤の校長像を著者なりに提示できる段階ではない。

## 注

1) 「斎藤喜博全集」12 可能性に生きる P426~440

斎藤喜博編著「境小の教師」明治図書 1974

斎藤喜博編「授業は教師がつくる」一莖書房 1975



斎藤喜博総指揮・解説「子どもの歌と表現—境小・島小合唱集CD付」一荃書房 1995

大槻志津江「境小での表現活動」事実と創造 16号 1982.9.

岡芹忍「島小・境小のフィルムを見て」事実と創造 31号 1983.12.

岸みね子「境小での歌唱教材の選択」事実と創造 39号 1984.8.

大槻志津江他3名「境小こぼれ話（1）～（12）」事実と創造 85～96号 1988.6.～89.5.

大槻志津江「境小でみた子どもの美しさ」事実と創造 104号 1990.1.

2)「斎藤喜博全集 12 可能性に生きる」P437

## 5. 終りに

この小論では、まず同じ校長経験者として、斎藤の実績（光の部分）に及ばないことを述べたうえで、今までほとんど論じて来られなかった斎藤の校長としての影の部分を重点的に取り上げた。具体的には、島村文化の評価と地域社会への接し方、一部の教師と女教師への対応、保護者（特に一部の母親）との関わり方、組合員校長を貫いた問題点、日教組及びその応援団と斎藤の考え方などへの批判と異論である。そして筆者は、斎藤の優れた教育遺産は、今後一層広く利用されるべきであると考えながらも、その実現のためには斎藤の影の部分も含んだ校長像の確立が必要であると考えている。異論や批判がないところに進歩はない。残した仕事の結果が良ければ他は不問にして良いのではないかという考え方も当然あるだろう。しかし校長像というからには目をつぶるわけにはいかない。斎藤は、数多くの長所に恵まれた半面、短所もはっきりしていた。そして差し引きして長所を活かし、大きな仕事を遺したと筆者は考える。この小論が、先細り気味の斎藤の遺産活用の拡大につながれば幸いである。

最後に、この小論をまとめるにあたって有益な助言をいただいた藤永保（日本教育大学院大学学長）と林義樹（日本教育大学院大学教授）、現地関係者で聴き取り調査など情報提供にご協力いただいた栗原知彦、田島健一、栗原寿郎、佐藤謙吉、有賀厚子その他の方々、現地調査をもとに教えていただいた坂元秋子（首都大学博士課程院生）、そして文献提供と聴き取りにご協力いただいた馬場信房（元都立小石川高校長）、資料提供をいただいた斎藤草子（一荃書房）の皆さんに厚く御礼申し上げます。（敬称略）

Research Paper

## A Comment on the School Management of Principal Saito Kihaku by an ex-Principal

Kubota, Takeshi

---

The main theme of this paper is to build up a new principal image of Saito Kihaku<sup>1)</sup> (1911~71), who, as principal, drastically improved the minds and skills of teachers and the motivation and scholastic achievement of students of Shima Primary School, Gunma-Prefecture, Japan, during 1952~63. Accordingly, he became one of the most famous educators in Japan after the Second World War. As his success stories have been written, examined, and reported by so many researchers and educators as well as Saito himself<sup>1)</sup>, the author would like to comment mainly on the problems of Principal Saito's school management, which have seldom been reported until now. Since the author<sup>2)</sup> has worked as principals or deputy principal of three different high schools, he will probably be qualified to criticize principal Saito's school management, compared with the author's. At the beginning and the end of this paper, the author makes a brief mention of Saito's activities before and after Shima Primary School periods.

**Key words:** Saito Kihaku, principal image, school management, Japan Teacher's Union

---

Notes

1)Saito's Complete Works of 18 volumes were published in 1969~71 by Kokudoshu, but only Japanese edition

2)Kubota Takeshi "SCHOOL REVOLUTION—Without Corporal Punishment and Strict Regulations" published by Natsume Shobo in 2000